

中心市街地の活性化と学生の地域活動に関する一考察

A consideration on vitalizing for central city and
community activity by university students

下田 泰奈、岩本 晃典

北九州市立大学 地域創生学群
『地域創生学研究』 第6号 2023年3月

中心市街地の活性化と学生の地域活動に関する一考察

A consideration on vitalizing for central city and
community activity by university students

下田 泰奈^{*}、岩本 晃典^{*}

Yasuna SHIMODA, Akinori IWAMOTO

<要旨>

北九州市立大学地域創生学群では、2009年の開設以来、地域創生学群生の授業の一環として、地域の活性化や地方創生に関わる地域活動を行っている。地域活動では、まちづくりや地方創生に関わる地域住民や行政の方々と日常的に関わりを持ちながら、活動を行っている。地域を活性化することにおいて、学生はどういった役割を果たし、何を学んでいるのであろうか。本稿では、大学生の地域活動における2つの出店プロジェクトの企画と運営を事例として取り上げ、地域活動そのものをキャンパス以外の学びの場として仮定した場合、学生にとってどのような学びがあり、どういった成長を経ているのか、大学生へのアンケート調査を通して考察する。

<キーワード>

中心市街地活性化、地域活動、大学生、地方創生、SDGs

1. はじめに

近年、我が国では特に地方において、少子高齢化が進み、地方創生の重要性が指摘されている。そのような状況の中、地域のにぎわい作りの担い手として、地方自治体や地元企業の協働の他、地方の大学や、大学に在籍する大学生も交えた多世代交流型の取り組みが、全国で活発化している。その取り組み事例は、文部科学省のホームページでも一部紹介されており、今や、地域住民との協働を通して、座学だけでない、実践的な学びの場が全国的に必要とされている状況にあると言えよう。

一方で、どのようにして地域資源を活かし、地域振興を図るのかという課題が人口減少の進む先進諸国において多く山積している現状がある。持続可能なかたちで地域を維持・発展させながら、住民の生活をどのように担保していくのかということが、大きな社会課題としてグローバルな規模で議論されている。共有資源の利用や管理における利用の度合

^{*} 北九州市立大学地域共生教育センター地域創生学群特任教員

いや仕組みについて、「適切な」方法の模索が世界的な課題として存在している状況にあると言えよう。

共有財や共有資源を巡る管理や利用は、世界規模で広く議題に上がっている。このような社会課題は、ある共有地の資源がオープンアクセスであり、希少資源で有限である場合において、多くのアクターの不適切な過剰利用によって、資源が枯渇し衰退してしまうことを指摘した「共有地の悲劇」(Hardin 1968) という概念によって、50年以上に亘って議論されてきた。日本国内の地域社会においても同様な課題があるのではないだろうか。地方創生をキーワードとして地域社会におけるそれぞれのアクター（ここで言うアクターとは、人的資源に限らず、場所や空間、時間といった概念的なものも含む）の「適切な」配置と協働により、個々のもつ力が最大限に発揮され、お互いに利害を得ることのできる仕組みを築くことは、容易なことではない。

ここで、地域社会における、複数の組織による協働事例について、学術的にどういった報告がされているか、いくつか例示する。佐藤（2012）は、震災で販路を失った企業への復興支援の一環として、宮城県の食品工業企業との協働を報告した。大学生や高校生によるアイデア出し、広報活動、屋台販売といった実地経験も行い、宮城県の食品産業界の復興支援だけでなく、人材育成の一助にもなったと結論づけた。森ら（2017）は、福井県の眼鏡メーカーと大学生の協働によるデザインプロジェクトの成果を発表した。学生にとっては、メガネについて深い学びを得る機会となり、企業にとっては、短期間でのメガネ制作を実現するプログラム創出の機会になったと報告している。また飯塚（2018）は大学教育における地域連携活動のあり方を考察し、課題解決型学習では、教員も学生も、連携先との信頼関係を築きながら学修に取り組むことの重要性を論じた。

このような大学生を交えた産学連携事業や地域活動は、学生にとって、どのような学びの機会となるのだろうか。内平・中塚（2016）は、地域連携活動の内的効果を、個人・組織・地域の3層から分析し、地域連携活動の内的効果を評価する具体的指標として提示した。池田ら（2016）は、四街道市と連携して商品開発プロジェクトを行い、プロジェクトの前後で学生の社会人力、自己の強みといった自己の内外に関する能力の自己評価を行った。社会人力については有意な評価の向上がみられた一方、自己の強みについては有意な増加がみられなかった。馬場（2021）はサービスラーニングプログラムにおいて、コーディネーターによって運営された事前学習が、教員によって運営されるプログラムが及ぼす学習効果と同様に、「積極性」「批判的思考力」「科目内容への理解や学び」が促進することを示唆した。上記、記載した文献は一例であり、地域住民と大学協働のもと行われる地域活動により、大学生は一地域住民として地方創生の一助を担う一方、実践的な学びを通して、社会人基礎力の礎ともなり得るさまざまな力を培う事例が、先行研究から示唆されている。

2. 本研究の背景と目的

本研究では、筆者らが特任教員として指導を担当している、北九州市立大学地域創生学群の「猪倉実習」と「小倉活性化プロジェクト」の2実習において、それぞれの活動の一環として行った中心市街地活性化を目的とした商品制作及び出店企画を通して、大学生がどういったことを学び、今後の地域活動や実習活動に活かしていくか、参加した学生へのオンラインアンケート調査（以下、アンケート調査）を通して考察する。

両実習において、アンケート調査は2022年11月9日に行った。実施したアンケート質問項目については、表1に示した通りである。設問8については、眞鍋（2015）が定義した、「地域創生力」を参照し、「コミュニケーション力」「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」「自己管理能力」「市民力」の6項目から、回答者の学生自身が、最も成長したと感じる項目を一つ選ぶよう指示した。

表1 本研究で実施したアンケート項目一覧

設問	質問項目
1	所属実習（猪倉もしくは小倉の選択式）
2	学年（1年生もしくは2年生の選択式）
3	氏名
4	性別（男性、女性、その他から選択式）
5	本企画に関わった度合い（3段階の選択式）
6	本企画に関わってみての自身の満足度（4段階の選択式）
7	質問6.の満足度を選んだ理由（自由回答）
8	本企画に関わってみて自分自身が成長したと感じる部分（地域創生力6項目より選択式）
9	本企画を行う上で難しかった点（自由回答）
10	実習活動において、地域の方々と関わる際に工夫している点（自由回答）

各実習の概要及びアンケート調査結果について、次章より、各実習の指導担当を担う岩本（猪倉実習）、下田（小倉活性化プロジェクト）がそれぞれ記載する。

3. 事例紹介

3.1 猪倉実習

3.1.1 実習の概要

猪倉実習は、地域創生学群の実習科目の一環で行われている学生自治の地域活動である。福岡県北九州市八幡東区高槻・猪倉地域の生業である農業を住民とのコミュニケーションの手段として位置づけ、耕作放棄地となっている土地を利活用し、畑の管理や運営、作付けなど学生自ら自治的に活動していく、2年間の実習である。学生が向かう猪倉町や高槻地域は、急所地区が多くさらに高齢化が加速している、いわゆる過疎高齢化地域である。

とりわけ猪倉町は約63%の高齢化率となっており、過疎化が進み空き家だけでなく、耕作放棄地が目立つような状況を大きな課題として位置づけ、活動は始動した。この実習は2009年に地域創生学群が創設されたのと同時に発足した活動であり、当初は生産、加工、販売を地域住民と共にやり、第6次産業化を目指すものとして始まった。

入学後の4月に実習の配属が決まった学生は、二年生の先輩達の指示のもと、シフトを組み「猪倉サテライト」で毎週土日に宿泊で農作業を行っている。この猪倉サテライトは、地域創生学群が貸借費用を負担し、担当教員と学生で管理・維持する仕組みとなっており、キャンパスから遠い（後述）猪倉町内での学生の地域活動の拠点となっている。また一方で、地域住民が地域活動を行う際の活動拠点の一部としての機能も有してきている現状もあり、地域の拠点としての場所性を帯びてきていると言える。また、農地は耕作放棄地となっていた土地を実習の運営費でレンタルする場合や、地域住民から無償で提供していただく場合など様々であるが、いずれも耕作放棄地となっている、もしくはなる可能性がある土地を学生が管理・運営する仕組みとなっている。

ただし、学生のみで、かつ一・二年生のみで運営していくことを前提とした農業の実習活動は、一長一短に行くものではないため、「農業アドバイザー」として地域住民に学生の指導を一部負担してもらいつつ、地域で学ぶ仕組みを作り上げてきた。

また、活動の醍醐味ともなっている、土日泊まりがけの農作業の「宿泊活動」は、学生の自治において運営がなされている。この宿泊で活動するには大きな意味がある。それは、地域課題を“住まう人の視点”で思考することである。たとえ土日限定であっても「暮らす」という行為によって、学生自身が住民として自らを位置づけ、その経験をもとに地域社会を考えることが重要であると考えているからである。

学生の「宿泊活動」の2日間を例示する。朝9時、それぞれの学生が自宅から「猪倉サテライト」へ公共交通機関にて移動してくる。大学周辺に1人暮らしをしている学生であれば、バスを2回乗り継ぎ、1時間弱の時間がかかる場所にあるため、土曜日は普通の講義が開始される時間よりも早く起きて準備をしなければならない。農作業が可能なツナギやスポーツウエアに身を包み、農地へ向かう学生の姿は、実習開始から10数年経った今ではこの地域の「日常」となっている。9時30分ごろになると、農業アドバイザーの自宅へ挨拶に行き、農作業の指示やアドバイスをいただく。学生は平日の講義の空き時間に、大学の活動支援室等でFAXを使って農業アドバイザーと農作業の計画を相談しているため、その時間では作業を行う最終確認をして農地へと向かう。農作業は季節や時期によって様々であるが、基本的には土づくりや耕起・畝立て、作物の植え付け、除草や柵の手入れなど多岐にわたる。昼食を挟み、1日目の夕方5時あたりまで作業を実施して、活動拠点である「猪倉サテライト」へ戻り、夕飯の支度を行う。夕食は事前に購入していた食材や、収穫時期には採れたての作物を使って、メンバーで調理して皆で夕食を摂る。その後、男女それぞれの部屋に戻り、シャワーを済ませて就寝となる。2日目は、9時ごろから作業を実施する。1日目の作業でできなかったものや、早朝に行う必要のある人工授粉等の

作業を行うことが主である。時には町内会の清掃活動や神事、地域のお手伝いなどに参加することもあり、概ね午前中に作業を終了させて、帰路に着くといった流れである。

今年で地域活動は13年目を迎え、現在は主に3つの固定のプロジェクトや北九州市域内で開かれるマルシェへの出店参加、地域コミュニティの行事や活動への参画など、多岐にわたる活動を行っている。2022年現在、学生の2年間における固定のプロジェクトは、耕作放棄地問題を解決する「猪倉農業関連プロジェクト」、地域のシンボルとなる商品を開発し郷土愛の醸成を目指す「オール地場産芋焼酎プロジェクト」、独居高齢者や急所地区に住む買い物難民への支援を目的とした地域の自治団体と共に活動を行う「わいわい市場たかつきプロジェクト」がある。

前述のように、猪倉農業関連プロジェクトでは、猪倉町の耕作放棄地を借用し、学生が農業アドバイザーの指導のもと、自治的な農作業を実施している。2022年度で学生が耕作している土地は9アール（約900㎡）ほどであり、四季折々の野菜を育てて、付近の地域住民へ販売する活動や、マルシェなどでの販売を実施している。

芋焼酎プロジェクトは、2015年から始まった活動で、産学官連携のプロジェクトとして、北九州市、北九州市立大学、地元酒造、そして猪倉町の地域が協力して地域のシンボルとなる地場産の芋焼酎「ほたるの里」を製造している。今では、学生と地域住民で焼酎用の芋である黄金千貫を育てて、地元酒造に加工を行ってもらうことで1つの商品を作り上げている。加工の過程においても学生が簡単なお手伝いを担わせていただくことにより、自分達が育てた芋がどのように加工され商品化していくのかその過程を学ぶことができる。また、販売においても酒類販売免許を持つ地元酒店に協力してもらうことで、学生も生産から加工、販売までの一連の工程を把握できるような活動となっている。

わいわい市場たかつきプロジェクトは、「地域のお困りごとを、地域で解決したい」という目的で、住民等が自ら立ち上げた「わいわい市場たかつき」という団体に対して、学生がそれに参画し支援を行っている活動である。2022年で10周年を迎えるこの活動は、高齢者の買い物支援として軽トラックの荷台に櫓（やぐら）を乗せて、野菜や米などの生活に欠かせない食材等を運搬しながら売る、いわゆる移動販売を行っている。その頻度は週2日ペースで、毎週月曜日と火曜日の午後から移動販売が行われているのである。準備を含めると、前日の午前中に米等の仕分け作業をして準備し、月曜日の当日朝9時から野菜や生鮮食品の仕分けや値段決め、値札貼りなどの作業をわいわい市場たかつきのメンバーと学生で行い、13時から移動販売車にて販売を実施する。この活動は地域福祉的な側面を持っており、高齢者の安否確認等を含めて包括的に高齢者の支援ができるように工夫されている。

さらに、所属している学生は本実習に配属が決まったと同時に、地域のまちづくり任意団体である高槻まちづくり協議会の正会員となる。そのため学生自身も住居地は異なるが、“地域の一員”としてまちづくり活動の運営を行う主体となっている。

また2021年より、北九州市小倉北区でマルシェを主催する「EAT LOCAL KOKURA」

という任意団体と協業して、生産者に光を当てるファーマーズ・マーケットを開催するなど、活動が多岐に渡っている。以下、猪倉実習を中心とした関係するアクターの相関図である（図1）。

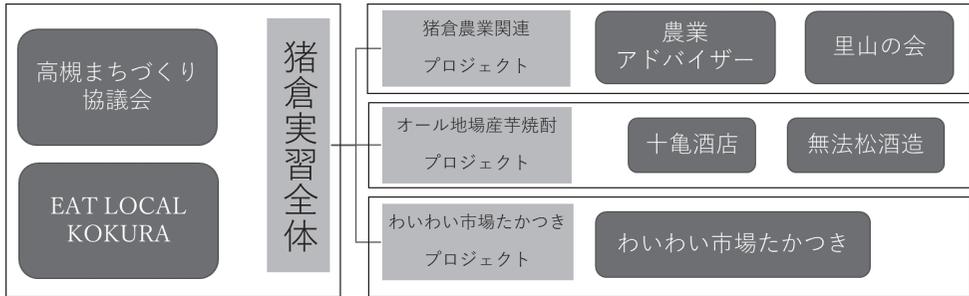


図1 猪倉実習を中心とした主要なアクターの相関図（筆者作成）

このように、実習活動では様々な地域のアクターとの関係性の中で成り立っているのである。

3.1.2 出店企画及び企画概要

本論文の事例として取り上げる「コラボサンドイッチ企画」は、2021年よりアイデアの検討会議が始まり、2022年からサンドイッチショップ「gomaiwa」との企画が始動した新規プロジェクトである（写真1）。このサンドイッチショップ「gomaiwa」は特異的な店舗となっており、山口フィナンシャルグループである北九州銀行八幡中央支店の中に所在する。この店舗は2021年8月に同支店がリニューアルする際、「コラボ店舗」として地元のサンドイッチショップを内接させ、八幡東区の中市街地であった中央町商店街周辺地域の賑わいを呼び込む店舗として始動した新しい取り組みである。支店内においてもテーブルとソファが置かれており、既存の銀行のイメージとは異なる空間を演出し、地域の人々が来訪しやすい、また拠点となるようなコンセプトを具現化している。

猪倉実習の学生が猪倉町で育てた野菜や猪倉町の地域住民が育てた野菜などを調理して、サンドイッチにしていこうというシンプルな協働活動だが、学生は季節の野菜を使ったメニューや商品名の考案や提案を行って実際にサンドイッチを作り、販売まで担うという一連の活動となっている。「gomaiwa」のオーナーや従業員等から様々なノウハウを教えてもらいながら作るため、相応のクオリティを求められる。それぞれのアクターの役割として、同銀行は売上の会計や帳簿といった基礎的な金融の仕組みについて指導を担い、「gomaiwa」においては、オーナーやスタッフが学生の考案したメニューの指摘やアドバイス、試食会の実施や販売方法の指導、衛生管理の方法など、サンドイッチショップの店舗営業における全てのノウハウを提供して協働して運営を行っている。このように、大学・



写真1 コラボサンドイッチ企画の掲載チラシ

銀行・サンドイッチショップの産学金（産業・学術・金融）が連携して、地域の賑わいづくりに取り組むようなプロジェクトの構造となっている。さらに、営業利益に関しては学生の活動資金として提供していただいております、現地までの交通費や試食会の物品購入費用等に充てています。では、学生はそのような実践的な場所にてどのような学びを得ているのだろうか。

3.1.3 アンケート調査結果

猪倉実習に所属の学生（23名、内男性5名、女性18名）にアンケートへの回答を依頼したところ、全員から回答が得られた。

まず、「5. 本企画に関わった度合いについて教えてください」については、図2の結果となった。23名中7名（30.4%）が「深く関わった」、2名（8.6%）が「やや深く関わった」、14名（60.8%）が「全く関わっていない」と回答した。

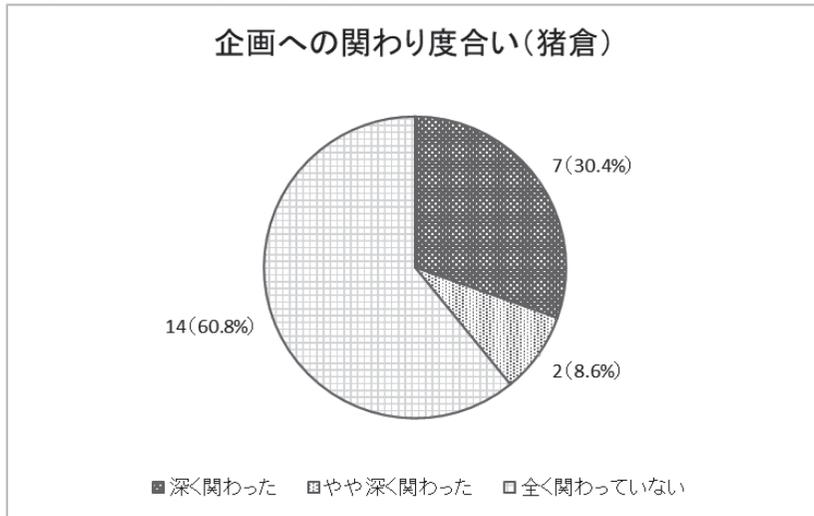


図2 企画への関わり度合い(猪倉実習) 回答結果

次に、「6. 本企画に関わってみて、自身の満足度はどれくらいですか?」との問いに4段階で尋ねたところ、図3の結果となった。本プロジェクトに関わりのある9名中7名(77.7%)が「大変満足」、2名(22.2%)が「やや満足」と回答した。図3の資料は、図2にて「深く関わった」「やや深く関わった」と回答した9名に限定している。

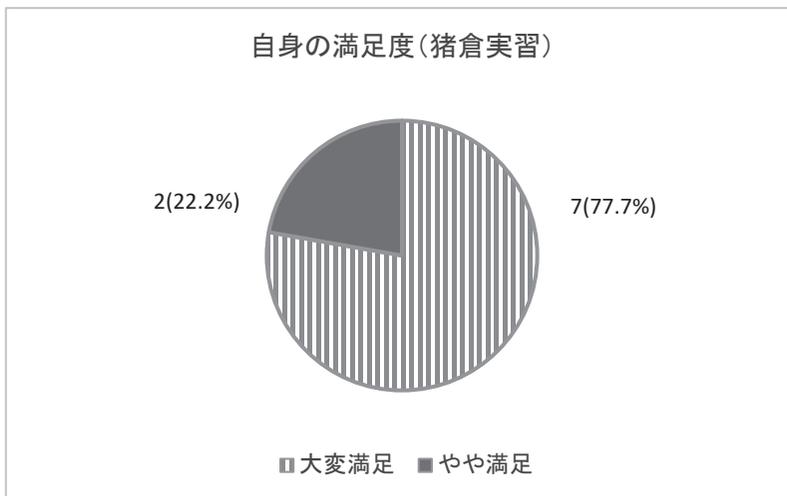


図3 自身の満足度(猪倉実習) 回答結果

アンケートの質問7で、上記のような満足度を示した理由について尋ねたところ、それぞれ、表2のような理由が挙げられた。販売の計画や商品の開発といった要因が深く関

わっていることが考えられる。また、それ以外にもアクターの志向性を学ぶことや、顧客のニーズを把握することなど、販売活動に意義を見出している意見も多くあった。表2の資料は、図2にて「深く関わった」と「やや深く関わった」と回答した9名に限定している。

表2 自身の満足度とその理由（原文のまま）

満足度	満足度の理由
大変満足	学生が提案させていただいたサンドイッチを実際に販売することができたからです。
	プロジェクトリーダーとして、みんなの意見も汲みながらやりたいことの実現ができていて感じているから。また、相手先の方との関係にも大変満足しているため。猪倉実習に何かを残したいと思っていたが、それが実現できているように思えるから。
	商品を開発するまでの過程や、販売をする際に何が大事になるのか、また広報の仕方などを実際に仕事としてそういうことをしている外部の方に教わることでとても刺激になった。
	次の予定も含めると、3回もオープンができた。コラボを通じて、経営者の方の考え方もたくさん聞かせてもらったりして学びが多くあった。
	作付け計画から、野菜を育ててレシピを作成して実際に販売までを行うことで消費者の生の声を実際に聞く事が出来てやりがいを感じたから
やや満足	コラボサンドイッチ企画に参加しましたが、企画から販売まで全てに関わることができ、本格的な動きを学ぶことができたから。
	プロジェクトの一員ではないが、実習の広報を担当しているのでSNS等でしっかりと発信することができたと考えている。結果的に完売することができたので満足している。
	制作・販売には関わったが、実際の販売のマネジメント的な部分にはまだ携われていないから。
	地元企業さんと連携しつつ、猪倉実習で育てたの野菜を使用することで、gomaiwaさまと猪倉実習の両団体をPRすることに繋がったという点で満足の行く企画であったと考える。一方で、私は企画の中心メンバーではなかったが、メニューの考案のアイデア出しなどに参加していたら自分の中でもっと満足度の高いプロジェクトになったのではと感じる部分もあるため、やや満足。

「本企画に関わってみて自分自身が成長したと感じる地域創生力」について、6項目から選んでもらったところ、図4のような結果が得られた。6項目の地域創生力について、「チームワーク・リーダーシップ力」が最も多く4名（22.7%）、次に「課題発見力」が3名（13.6%）、「計画遂行力」と「市民力」においてはいずれも1名ずつ（各18.2%）となった。以下、図4の資料は、図2にて「深く関わった」と「やや深く関わった」と回答した9名に限定している。

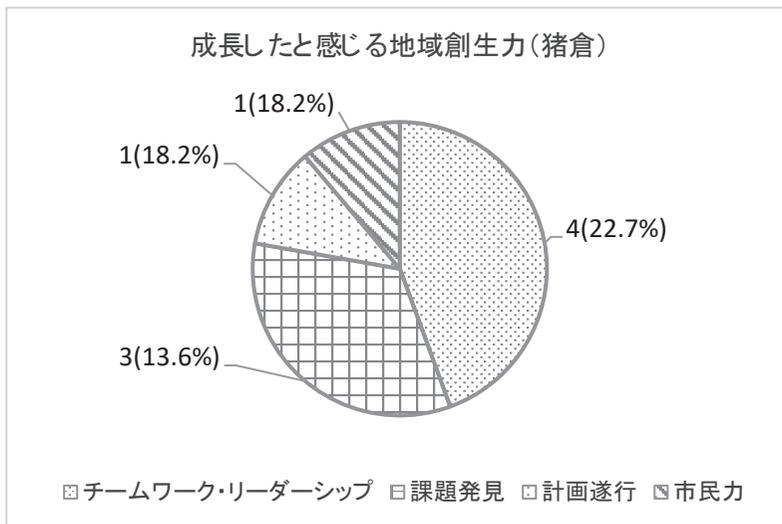


図4 成長したと感じる地域創生力（猪倉実習）回答結果

次に、本企画を行う上で難しかった点を自由回答で記入依頼したところ、以下の回答が得られた。前述した地域創生力に従って、回答結果を分類したところ、「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」の3つに分けることができた。以下、表3の資料は、図2にて「深く関わった」と「やや深く関わった」と回答した9名に限定している。

表3 本企画を行う上で難しかった点（猪倉実習）回答結果
（回答一部抜粋、筆者にて分類整理）

項目	本企画を行う上で難しかった点(回答一部抜粋)
チームワーク・リーダーシップ	頻繁に行ける場所ではないので基本的に銀行の方とメールのやり取りとなるのが少し難しく感じた。それから、野菜はいつも都合よくできる訳では無いので、オープン時期や販売するサンドイッチの擦り合わせが少し大変だったように思う。
	中心メンバーではない中で、どのように関わるか模索すること 今まで行なった事のない規模で新しい企画の形で販売に取り組んだところ。今まで小規模で実習単体で行ってきた活動と他企業と連携しながらの大規模な販売では配慮する部分が大きく変化したと感じた。
課題発見力	どういった商品が消費者の方に求められているのかを考えつつ、自分にしか作れないような思いつかないような商品を作ること。 純利益を上げるために、価格を考えたり経費や人件費でどれだけ抜かれるのかなどお金について考えたこと。また、商品の価値に見合った価格をつけたり、その逆を追求することも難しかった。想いや手間がかかっているとはいえ、それを他者に共感してもらわないと、同情で買ってもらうのではダメだなと感じた。
	初めての試みで、どういったお客さんがどのくらい多くいらっしやるのか全く分からない状態で進めたので価格設定などが難しかった。 SNSでの発信の難しさを感じた。カウントダウンで投稿する際は、内容や写真などを工夫する必要があり、特に難しいと感じた。
計画遂行力	野菜が上手く出来なくて実施出来ないレシピがあったり、下準備の時に時間や経費がかかり過ぎたりした事があった。実際に利益を出すことも目標の一つである為、経営やリスクマネジメント力を身に付けなければならないと感じた。
	野菜を猪に食べられてしまい、実現することが出来ないメニューがあったことです。また、猪倉産の野菜を持続的に供給し、サンドイッチに使用することが難しかったです。 コラボ先の方との意思疎通や、お客様が買いたいと思うサンドウィッチを思考することに難しさを感じました。

また、自由記述にて、「本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点」に関して質問を取ったところ、以下表4、表5のような回答が得られた。表4については、本企画に「深く関わった」「やや深く関わった」と回答した学生等の意見であり、表5は「全く関わっていない」と回答した学生の意見である。比較すると表5の回答は、挨拶や声掛け、傾聴や礼儀作法などのコミュニケーションや対人関係に関する記述が多くあった。その他、主体的に学生から取り組む姿勢なども見られた。一方で表4では、コミュニケーションや対人関係についての記述に付随して、特にアクターとの関係性を意識した記述が見られたことに大きな違いがあった。

表4 本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点
（猪倉実習「深く関わっている」「やや深く関わっている」）回答結果

本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点
挨拶を自分からし、何か一つでも自分から話題を出し、お話をすることです。
報連相を徹底すること。何か変更があれば直ぐに連絡をした。また、地域の方は僕たちを家族のように可愛がってくれているが、親しき中にも礼儀ありを忘れないように心がけている。
まずは、地域の方のお話を真剣に聞く。次に雑談を通してコミュニケーションを図るようにしている。
聞き手に徹すること。実習で関わる地域の方は高齢者の方が多かったり、自分自身を強く持っている方が多く様々な体験をされているため、学生が話すというよりは地域の方のお話を学生が聞くというスタンスの方が円滑に進むと考えている。
私がいつも意識しているのは、「こういう企画があるから関わる人」で終わらせない為に、いい雰囲気を作るというのをいつも考えて行動するようにしている。なので雑談だったりわいもない話を大事にするように心掛けている。
リアクションを大きくする。畏まりすぎて固まっていたら「話面白くないのかな」と相手が思ってしまうので、リアクションをしっかり取ることで相手の心を開けると個人的には感じている。だが、挨拶をしっかりするか、当たり前のことはきちんとやる。
何気ない時間に地域の方とできるだけ雑談(懇談)すること
自分たちが普段関わることのない方々と関わる事が出来ている為、積極的にやりたいことを話すようにしている。
自分たちがしたいことを押し付けるだけではなく、先方が求めていること、学生にしかできないことを関わる上で意識しています。

表5 本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点（猪倉実習「全く関わっていない」）回答結果

本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点
挨拶やマナーなど礼儀を忘れないこと。
地域の方に対して尊敬する気持ちを持って関わるようにしている。
学生間でも情報共有をしっかりと、地域の方にも情報共有をきちんと行うこと。
この企画には関わっていないが、実習活動で地域の方々と関わる際は、名前と顔を一致して覚えて貰えるよう、なるべく積極的に自分から話しかけに行くこと。
笑顔で挨拶、話を聞く姿勢、話しかける時の声の大きさ
地域の方の話の中で疑問に思ったことがあれば、次の活動にも活かせるようにすぐに質問している。
気になったことがあるときは、積極的に自分から話を聞きに行くこと。自分の実習活動の目的や意義を実習を知らない人にも説明して理解してもらえるように、常に目的などを意識しながら活動をするようにするということを出店などを通して考えている。
地域の方が動いているときに自分が何もしていない状況をできるだけ作らないように意識している
礼儀等に関するマナーは失礼のないように意識しています。また、感謝の気持ちをもって元気に接するようになっています
外部の方との連絡の窓口は固定すること。どこまで学生であるのかハッキリさせておくこと。
地域の方は固く接するよりも柔らかく接する方が受けがいいように感じるので、しっかりするところはしっかりしつつ固くなり過ぎず接するよう工夫している
工夫している事は、相手と同じ目線で話す、目を見て話すこと。自分の話をなるべく控え傾聴を心がけている
自分からコミュニケーションを取りに行くことを心がけています。また、地域の方々にはよく話をしてくださるので傾聴を意識しています。前提に地域に入る際顔と名前を覚えていただくことが第一に必要だと考えています。ですので受け身ではなく積極的に動くことの必要性を日頃実感しながら活動しています
反省として共有をしっかりと行うことが大事だと思った。言葉だけの共有ではなくイメージの共有をしていないと認識のズレが生じてくると感じた。

3.2 小倉活性化プロジェクト

3.2.1 実習の概要

北九州市立大学が所在する福岡県北九州市小倉南区から、モノレールで約10分という距離に、北九州市の中心市街地の一つである小倉（こくら）がある。「小倉活性化プロジェクト」実習は、地域創生学群開設当初から設立された実習の一つであり、2022年現在、表6に示すような活動を大学生の授業の一環として行っている。

当実習には、例年、地域創生学群生一・二年生20名程度（2022年度は22名）が所属し、週に一回の授業コマにおいての情報共有の他、授業時間以外の時間も活用して、さまざまな地域活動を行っている。学生は、各自の希望に応じて、表6に示すような媒体（チーム）に分かれて2年間活動する。例えば、「green bird 小倉チーム」は、認定NPO法人 green bird を実習受け入れ先として、小倉駅周辺のごみ拾い啓発活動を定期的に行っている。それ以外にも、地元企業と協働してごみ拾い啓発活動を行い、学外の企業関係者や、一般市民の方々と一緒に行う清掃活動の企画や広報活動、運営を行っている。他には、SNSを活用してまちの魅力を発信する「Kokulike（こくらく）」という活動や、地域で活躍される方を講師としてお招きし、ワークショップやイベントを企画する「idea+（アイディアプラス）」「夜会（やかい）」といった活動も行っており、いずれの活動についても、「人と人を繋ぎ、小倉のまちを活性化すること」を活動目的としている。

各活動では、企画書の作成や、地域の方への協働依頼、活動周知のための広報活動、企画当日の運営といった、一社会人と同様のスキルが必要となる。高校を卒業したばかりの大学生たちが、座学だけでなく、地域における実践活動を通してビジネスマナーや社会人基礎力といった力を学びながら、学外の方々と協働していくことは、ときに、さまざまな困難が生じるが、これらの地域活動は、地域の方々の十分な理解と指導の下、成り立っている活動と言えよう。上記のような実習活動は、2020年初めに起こった新型コロナウイ

ルス感染症による影響も大きく受けたが（岩本・下田 2022）、小倉周辺の地域の方々にご指導いただきながら、学生主体の実習活動の運営が行われている現状にある。

表 6 2022 年度現在の「小倉活性化プロジェクト」の主な活動

媒体名	主な活動内容
統括	実習全体の学生代表。実習リーダーと副リーダーで、実習全体の管理、運営を行う。
green bird 小倉チーム	認定NPO法人green birdを受け入れ先として、小倉駅周辺のごみ拾い啓発活動を行う
Kokulike	小倉のまちの店舗や小倉で活躍される社会人の方を取材し、SNSを活用して発信する
idea+	主に小倉周辺で活躍されている方を講師としてお招きし、ワークショップやイベントの企画・運営を行う
夜会	小倉駅中心及び近隣で活躍されている方を講師としてお招きし、イベントの企画・運営を行う（夕刻限定開催）
その他	小倉周辺で開催される行政イベント、季節行事等への参画、学年企画など

3.2.2 出店企画及び企画概要

本研究では、北九州市小倉で開催された「小倉城竹あかり」イベントにおける商品制作、出店に関する事例報告を取り上げる。

「小倉城竹あかり」は、小倉城竹あかり実行委員会が主催して、2019年11月に初めて開催されたイベントである。福岡県北九州市の名所の一つである小倉城の外周に、手作りの竹灯籠等の明かりを飾り、観光産業の一躍を担いたい、という市民の思いから実現した取り組みで、2019年以降、毎年11月初旬に開催されている。毎年、竹灯籠に使用される竹は、北九州市内で竹林被害のある山林の竹を積極的に伐採して活用し、市民ボランティアが中心となって、竹に細工を施す。イベント終了後は、灯籠として飾られた竹は再資源として活用される。「竹害から竹財へ」をキャッチコピーに、SDGsの理念も継承しながら、循環型社会の創生を意図している。北九州市は2018年と2022年に「日本新三大夜景都市」にも認定されており、本イベントを通して、一泊二日で北九州市を満喫する宿泊型観光の仕組みづくりのきっかけにして欲しい、との考えから始まった。2019年11月のイベント初回開催時は、小倉城周辺に、約16,000個の竹灯籠が飾られた。2022年の開催時は、北九州市が共催し、市内経済団体や、企業が後援・協賛し、2022年11月2日から2022年11月6日の五日間に亘って開催された。北九州市内の竹林から伐採された竹は約40トンにもなり、約30,000個の竹灯籠が飾られた。会期中の入場者数はのべ46,000人、竹灯籠制作や点灯作業に参加した市民ボランティアは約3,500人となり、多くの観光客や地元市民でにぎわうイベントとなった。

本イベントに、小倉活性化プロジェクトは、2019年の初年度から毎年関わらせていただいており、市民ボランティアの一員として、竹灯籠の設置や、灯籠への点灯・消灯作業の手伝いを行ってきた。

2022年度は、新たな取り組みとして、上記点灯・消灯作業に加えて、学生手作りの「竹灯籠」の販売を会場出口にて行った。竹灯籠の制作は、大学の夏季休暇（2022年8月及び9月）を中心に行い、小倉活性化プロジェクト所属の大学一年生及び二年生22名が交代で制作を行った。

竹灯笼の制作については、市民ボランティアの方々にアドバイスをいただきながら、主に以下の6工程を経て行った。

- ① 竹の選定と切断
- ② 竹をトーチバーナーで炙り、油抜きした後、磨く
- ③ デザインを決定し、竹灯笼に細工（穴あけ作業）
- ④ 竹灯笼を磨く、研ぐ
- ⑤ 風通しの良い場所で保管
- ⑥ 商品パッケージとロゴを貼り、梱包

「小倉城竹あかり」会期中の週末2022年11月4日から11月6日までを販売予定期間とし、17時半の点灯後、18時から販売した。なお、過去に、小倉活性化プロジェクトとして地域の祭りや、商店街内での出店を行った実績はあったが、長引く新型コロナウイルス感染症の影響により、近年では出店機会が激減し、また、進級に伴って実習所属学生にも変更があったことから、2022年度実習所属の学生による出店企画は今回が初めての試みとなった。



写真2



写真3



写真4

写真2) 竹灯笼の点灯作業の様子。市民ボランティアによる手作業で行われる

写真3) 小倉城を背景に竹灯笼が城内を明るく照らす様子

写真4) 小倉活性化プロジェクト制作の竹灯笼サンプルと商品ポップ

イベントを主催する小倉城竹あかり実行委員会と学生及び担当教員で協議の上、竹灯笼は3種類の模様を作成し、1本1,000円で会場出口にて販売した。当初、イベント会期中の週末2022年11月4日（金）から11月6日（日）までを販売期間として想定し、イベ

ント初日の11月2日（水）から商品サンプルと販売告知のポップを会場内に設置した。11月4日（金）18時から販売を行ったところ、1時間半で準備した全商品（29本）が売り切れ、計29,000円の売り上げを達成したため、残りの会期期間は竹灯籠の販売は行わず、点灯作業へのボランティア参加のみ行った。また、今回の出店企画は、当初、小倉活性化プロジェクト所属の二年生が企画運営を担う「学年企画」として実施したが、実際に竹灯籠の制作及び販売を行うには人手が必要となり、一年生も一緒に活動を行った。

3.2.3 アンケート調査結果

小倉活性化プロジェクト所属の一・二年生全員（22名、内男性8名、女性14名）にアンケートへの回答を依頼したところ、全員から回答が得られた。以下に、各設問の詳細を記す。

まず、「5. 本企画に関わった度合いについて教えてください」については、図5の結果となった。22名中5名（22.7%）が「深く関わった」、17名（77.3%）が「やや深く関わった」と回答した。

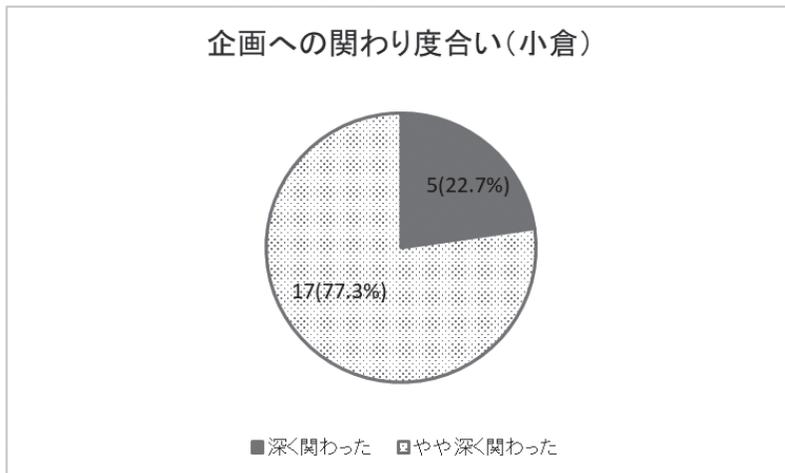


図5 企画への関わり度合い（小倉活性化プロジェクト）回答結果

次に、「6. 本企画に関わってみて、自身の満足度はどれくらいですか？」との問いに4段階で尋ねたところ、図6の結果となった。22名中2名（9.1%）が「大変満足」、14名（63.6%）が「やや満足」、6名（27.3%）が「やや不満」と評価した。

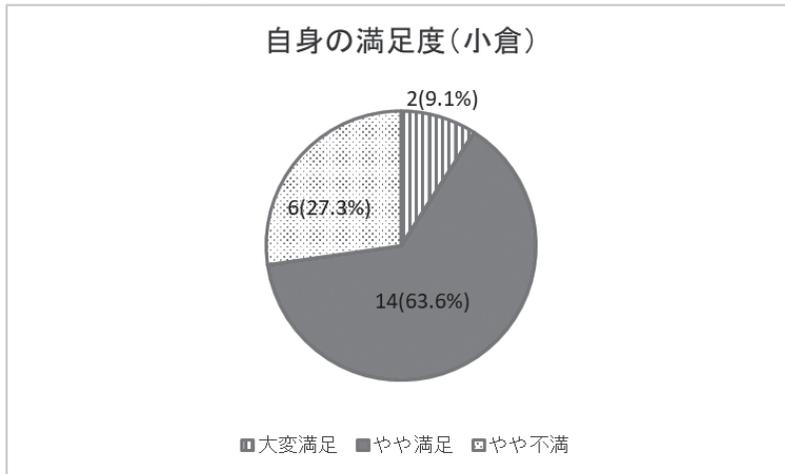


図6 自身の満足度(小倉活性化プロジェクト)回答結果

アンケートの質問7で、上記のような満足度を示した理由について尋ねたところ、表7のような理由が挙げられた。当企画に対する満足度につき、商品制作に関わった経験や販売に携わることができたか否か、といった要因が深く関わっていると考えられる。

表7 自身の満足度とその理由(小倉活性化プロジェクト)回答一部抜粋

満足度	満足度の理由(回答一部抜粋)
大変満足	たくさん売れたから
	制作など日頃できない体験をさせて頂きとても貴重な経験となった
やや満足	制作や企画などに携わることではできたが当日の販売をすることができなかったため
	商品が売り切れて、点灯作業のみになったから
	普段だと関わることのない方と関わったことや、商品を実際に作って販売するという貴重な体験ができたから
	自分達で実際に作ったものを商品として売るという経験が初めてだったため、価格を設定したり売り出しかたを考える仮定を体験できたことが貴重な経験だったと思ったからです
	初日に商品が売りきれすぎてしまい販売をすることが無かったことが少し残念です
	二年生の学年企画としてのイメージが強かったため、一年生がどこまで深く関わればよかったのか分からなかったためただ実際に自分達が製作した竹が完成し販売され売った時は嬉しかった
やや不満が残る	準備段階では不安が残る形となったが、実際に販売し、成果が得られたと感じたため
	自分が販売担当する前に売り切れてしまったので販売までしなかった
	質をもっと高くできた点とメンバーによってプロジェクトへの熱量の差が激しかったからです 今回は数字だけを見れば上手くいったように考えることが出来ますが、値段設定も妥協したのでこの評価です 制作段階では手順や段取りが上手く共有されておらず、何をしているかがよく分かっていなかったから また、販売当日は、自分のシフトが最終日だったこともあり、販売に関わることは無かった 売り切れた後にシフトが入っている人達は小倉城に行って何を手伝うのか、どんな活動をするのか 上手く共有されておらず、無駄な時間もあったから

「本企画に関わってみて自分自身が成長したと感じる地域創生力」について、6項目から選んでもらったところ、図7のような結果が得られた。6項目の地域創生力について、いずれも3～6名の回答が得られ、本企画を通して、学生自身が得られたと感じた地域創生力に関しては、いずれかの項目に偏ることなく、概ね均等な結果が得られた。

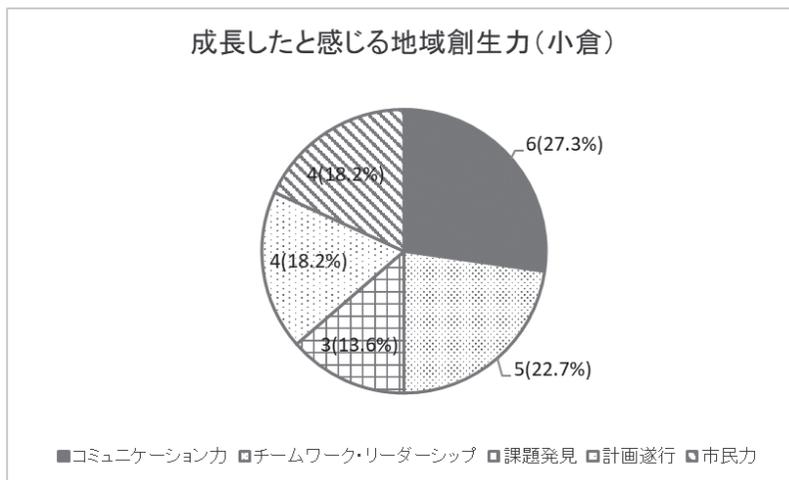


図7 成長したと感じる地域創生力(小倉活性化プロジェクト) 回答結果

次に、本企画を行う上で難しかった点を自由回答で記入依頼したところ、表8のような回答が得られた(回答一部抜粋)。筆者の方で、回答内容の種類に応じて、地域創生力に基づいて分類整理した結果、他者との進捗共有に関する「チームワーク・リーダーシップ」、商品の制作作業や販売条件に関する「課題発見力」、スケジュール管理に関する「計画遂行力」の3項目に関する回答が多く得られた。

表8 本企画を行う上で難しかった点
(小倉活性化プロジェクト) 回答一部抜粋、筆者にて分類整理

項目	本企画を行う上で難しかった点(回答一部抜粋)
チームワーク・リーダーシップ	商品づくりで、実習メンバーが複数日に分かれて作業したため、作業日にどの作業をすればいいかの共有が難しかった
	人数が多いので何をやるのか、どうやってするのかといった内容の引き継ぎが難しかったです
	頻繁に参加できない学生の立場で、モノをつくるということですが
	シフト制で行っていたため、当日の動きが毎回違って戸惑うことが多々ありました
	しかし、作業をしていく上で統括の人たちが流れを前日に教えてくれたりしていたので途中からは把握して参加することができました
	前回の進行状況が分からないまま自分達の作業をしなくてはならず、実際に竹を掘るときに作業がスムーズにいかなかった点
	連絡の共有です 夏休みの作業でも少しスムーズに前に竹あかりの作業をしたグループとの連携が取れていれば、より捗ったと思います
課題発見力	シフト制だったので、共通認識を取るのが難しかった
	工場での竹あかり制作期間の際に、竹あかり制作やグループ内共有をスムーズに行うことができなかったこと
	売難さ
	商品の価値をつけること
	竹灯籠の需要や今後の事業を考えた上で値段設定をおこなうこと
	商品の値段の設定について適切な値段が分からなかったこと
計画遂行力	初めての企画だったため、竹灯籠の価格設定が難しかった
	初めての販売だったため、値段の相場が分からずいくらで売るのが適切かが難しかった
	竹の作業と販売
	販売価格や販売物の質に関して新しい企画になると慎重に設定しなければいけないことだと感じた
	無かったものを作り出すことです これまでに無いプロジェクトを1から企てることは難しく、計画通りにいかなかったことが難点でした
計画遂行力	計画管理が難しかったです
	商品を作る時にシフトごとに動いていたのですが、前のシフトの人から進行状況を伝えられなかったり、今日何をすべきかが分からないことがあったため、今後は計画を見直す必要があると思いました
	初めての企画ということもあり、予測することが難しかったことです
	販売経験があるメンバーも少なく、また気温や湿度で変化する竹を販売するとなったことで、予想していなかったことが起きることをどう対処するか考えるのが難しかったと感じています

最後に、「本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫しているがあれば記入してください。」と聞いたところ、表9のような回答が得られた。(回答一部抜粋)。「自分から話しかける」「挨拶をする」「礼儀を心がける」「感謝の気持ちを忘れない」「積極的にコミュニケーションをとる」といった回答が多数得られ、本企画に限らず、地域活動を行う際には、上記のような積極的なコミュニケーションと礼節、感謝の気持ちをもった姿勢を重要視していることが示された。

表9 実習活動において地域の方々と関わる際、工夫している点
(小倉活性化プロジェクト) 回答一部抜粋

実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点(回答一部抜粋)
自分から積極的にはなすこと
協力が「あたりまえではない」ということを理解することです。心からの感謝が現れると思います。
必ず挨拶をする、積極的に話しかけて交流を深める
地域の方とコミュニケーションをとる中で地域の方がどういう課題に直面しているのかやどういう地域にしたいと望んでいるのかなどを感じることができればと思い、積極的にコミュニケーションをとるようにしている。
お手伝いをしてくださった方々の話を明るく聞く。実習活動の話ばかりではなく日常的な会話などもした。
できるだけ、コミュニケーションをとり、より円滑に進められるように心がけている。
挨拶、礼儀は絶対としていた点。
相手のお話を聞きながらよく聞くことや、積極的にコミュニケーションを取ることです。また、わからないことがあつたらすぐ聞くようにしていました。
ただけりに関わってくださっている方々は私たちよりも小倉や竹の現状に詳しい方たちであるのでその方々への敬意を忘れず主体的に動き行動した点。
分からないことも多かったため、地域の方々と積極的にコミュニケーションをとるようにアドバイスを頂いた。
竹の作業の際に教えて頂く方とコミュニケーションをたくさん取った点。販売の際に来ていただいた地域の方へほしいと思ってもらえるような呼び掛けや説明をわかりやすく工夫しました。
地域の方々にも仕事などがある中で大学生の活動に協力して下さっているので、常に謙虚な姿勢で感謝の気持ちを忘れてはいけないと感じながら参加した。

4. 考察

本研究では、地域活動の一環として、大学生による製品開発及び出店企画に関する事例を2つ紹介した。両事例共に、デザイン面の考案から出店方法に至るまで学生のアイデアを中心に進め、地域の方々のさまざまな支援・指導を得て、学生は実際に地域の方々に商品を提供するという経験を得ることができた。猪倉実習については、すでに定期出店企画として、本調査までに3回の出店経験を経た一方、小倉活性化プロジェクトについては、年に一回のイベントでの初めての出店に対する調査結果となった。

猪倉実習では、本企画に対して、大変満足、やや満足という回答のみが得られた。その一要因としては、実習活動全体から本企画のメンバーを募集し、任意の活動として実施した点にあると考える。自ら選んだ企画ということもあり、学生の主体性が発揮された結果であると考えられる。そのため、企画を実施する前段階でどのように学生の動機付けを工夫するのかという点が重要となる。

さらに、本企画に関わってみて自分自身が成長したと感じる地域創生力について、6項目の4つが該当し、「チームワーク・リーダーシップ力」が最も多く4名、「課題発見力」が3名、「計画遂行力」と「市民力」に1名ずつといった結果となった。これについても、本企画の特性によるものが大きく、猪倉実習の既存の3つのプロジェクトとは別に、企画メンバーを募集してチーム編成したことから実習内であってもまずはチームワークが必要となったと考えられる。また関係するアクターが、北九州銀行八幡中央支店の行員の方々

や、サンドイッチショップ「gomaiwa」のオーナーやスタッフの方々、教員の4者であったため、ミーティング日程の調整や試作会の実施における会場の状況把握など、アクター間のコミュニケーションや利害関係を把握した上で地域課題を設定し解決していくことが重要となったため、このような結果に結びついていると考えられる。本企画を行う上で難しかった点に関しても「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」の3つ大きく分けられることができ、前述したような地域創生力を身に付けていく学生の成長の途上を観ることができた。また、本企画を含めた実習活動において、地域の方々と関わる際、工夫している点の自由記述では、学生の企画への関り度合いによる比較を行うことができ、その結果から、「全く関わっていない」と回答した学生に対して、「深く関わっている」「やや深く関わっている」学生は、これまでの猪倉実習のアクターとは異なる多様なアクターとの接触や協働によって新たな観点と取り組む姿勢を持つようになったことを確認することができた。この結果から、実習活動の内部の各プロジェクト共通で身につく力と、個々のプロジェクトにおいて身につく特異的な力が存在していることを示唆する結果が得られたのではないかと考える。

小倉活性化プロジェクトについては、大変満足、やや満足という回答が7割程度得られた一方、やや不満という回答も3割近く得られた。その理由として、企画、制作、販売といった経験が貴重だった、との声があった一方、制作から販売に至るまでの計画の見通しが立てにくかった点や、学生間での情報共有の難しさ、予想以上の売れ行き好調により、販売活動に関われなかった学生が多数いたことなどが挙げられる。今回の出店企画の反省を生かし、次年度以降、再度、出店活動を行う場合は、計画段階からの十分な協議や共有を行う他、一日あたりの販売数に制限をもうけるなど工夫して、全員が制作から販売まで関われる仕組みづくりを行う必要があると考える。

また、「本企画を行う上で難しかった点」についても、上記の満足度調査と同様の結果が得られ、「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」の3点に大別することができた。今回、初めて竹灯籠制作に関わる中で、22名の実習メンバーが関わることにより、指導してくださる地域の方々、学生、教員という3者の間のコミュニケーションに一部難しい点があった他、商品として完成した竹が乾燥により割れる、カビが生える、竹灯籠の制作技術が学生により異なる、といった、竹灯籠制作そのものに対する課題も散見された。本イベントにおいて、竹灯籠の販売を行うことも初めてであったため、竹灯籠の価値の付け方、売り出し方、販売動向についても、予測が難しい状況にあった。上記のような今後解決すべき課題が多数あった一方、学生自身が成長したと感じる地域創生力については、「コミュニケーション力」「チームワーク・リーダーシップ力」「課題発見力」「計画遂行力」「市民力」のいずれも概ね均等な回答を得ることができ、本企画全体を通して、小倉活性化プロジェクト実習全体の地域創生力は高まったと考えられる。

今回取り上げた、猪倉実習と小倉活性化プロジェクトの実習は、指導教員、学生メンバー、行っている活動内容、出店概要、関わる地域の方々といった実習環境が異なる中、

出店企画を通して、いずれの活動においても、地域創生力の中の、「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」の3点について学生は困難を感じたことが示された。その一方で、猪倉実習は3回目の出店、小倉活性化プロジェクトは初めての出店だった点を比較すると、回数や出店経験を重ねることで、関係者間の情報共有の仕方や、計画の立て方、より売れる仕組み作りといった発展的な学びも体得することができると言えよう。両実習共に、地域活動を行う際に学生が心がけている点として、積極的なコミュニケーションや、挨拶や礼節を重んじるといった回答が得られ、地域に出る際の姿勢についても、個々の学生が意識していることが示された。

最後に、「猪倉実習」と「小倉活性化プロジェクト」における2つの企画に共通する点では、本企画を行う上で難しかった点として、「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」の3つに大別できるということである。これは両企画の構造の共通性に符合していると考えられる。商品の質的な違いはあれ、各アクターとの協働やミーティング、商品の立案や試作、作成から販売に至るプロセスの共通性があったことが両企画の共通性に繋がっていたと考える。

5. おわりに

本研究では、北九州市立大学地域創生学群の「猪倉実習」と「小倉活性化プロジェクト」の2つの実習において、キャンパス外の地域活動を学びの場とし、商品制作及び出店企画を通して、大学生がどういったことを学び、今後の地域活動や実習活動に活かしていくか、参加した学生へのアンケート調査を通して考察した。眞鍋（2015）が定義した「地域創生力」を参照し、「コミュニケーション力」「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」「自己管理能力」「市民力」の6つの枠組みからアンケート結果を考察した。その結果、商店街や中心市街地における地域活動において、学生たちは「地域創生力」を身につけている実感があり、特に、「チームワーク・リーダーシップ」「課題発見力」「計画遂行力」の3つに関して、課題意識を持って取り組んでいることが明らかになった。

一方で、今回の2つの活動は、中心市街地活性化を目的とした単発的な商品制作及び出店企画であるがゆえに、常時行っている活動とは異なり、短期的視点からの考察が否めない側面がある。細野（2016）が主張しているように、長期的なコモンズの利用を行うとき、地域コミュニティの存在が重要である。今後の日本社会において、学生という存在を一つのアクターとして含めた、地域資源の利用・管理に組み込んだまちづくり、地域づくりの仕組みの構築がこれからの地域創生において残された課題であると考えられる。地域社会の再生と創造を通して、SDGsの理念にも照らし合わせると、今後も継続的に取り組むことのできる仕組み作りが必要となる。特に地域創生学群の場合、学生は授業の一環として関わっている地域活動であることから、進級に伴って、実習構成メンバーが入れ替わり、実習指導教員についても交代の可能性がある。また地域社会においても、関わるアクターやイベントの主旨・規模が変動する可能性があることなど、さまざまな側面から、流動的で

あることが大きな課題となる。地域住民と大学協働のもと行われる地域活動には、大学生が地方創生の一助を担う活動の継続性を担保するための仕組みづくりを検討し、モデル化していくことが重要になると考える。

<参考文献>

- 飯塚重善, 2018, 「大学教育における地域連携活動のあり方に関する一考察」, 国際経営論集 No.55 2018, 97-111
- 池田幸代, 小早川睦貴, 中尾宏, 2016, 「大学の地域連携による学生教育の取り組み — 地域資源を活用した商品開発プロジェクト —」, 東京情報大学研究論集 Vol.20 No.1 pp.1-13
- 岩本晃典, 下田泰奈, 2022, 「新型コロナウイルス影響下における学生主体の地域活動の変化と今後」, 北九州市立大学地域創生学群『地域創生学研究』第5号, 2022年3月, 13-32
- 内平隆之, 中塚雅也, 2016, 「大学生による地域連携活動の内的効果と評価の枠組み」, 農林業問題研究 Journal of Rural Problems 52(4), 211-216 (2016)
- 佐藤飛鳥, 2012, 「宮城県食品工業 学生参加による販路・マーケティング支援プロジェクト」, 東北工業大学新技術創造研究センター紀要 EOS Vol.25 No.1, 41-48.
- Hardin G, 1968, The Tragedy of the Commons: The population problem has no technical solution; it requires a fundamental extension in morality. Science 162: 1243-1248.
- 馬場亮志, 2021, 「サービス・ラーニングコーディネーターによる事前学習指導が大学生の学習成果に及ぼす影響 ～リフレクションシートによる分析～」, 教科開発学論集第9号, 11-21
- 細野助博・風見正三・保井美樹他『新コモンズ論—幸せなコミュニティをつくる八つの実践—』中央大学出版部.
- 眞鍋和博, 2015, 『「自ら学ぶ大学」の秘密—地域課題にホンキで取り組む4年間—』九州大学出版会.
- 森優子, 小林政司, 小永組雄, 小永真也, 2017, 「産学連携によるメガネデザインプログラム 福井県のメガネメーカーと大学生の協働によるデザインプロジェクトの成果」, BULLETIN OF JSSD 2017 日本デザイン学会 デザイン学研究, 420-421

<参考資料>

北九州市ホームページ:「北九州市が『日本新三大夜景都市』にランキング1位で再認定されました!」

(<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/san-kei/09600088.html> 2022年12月12日最終閲覧)

小倉城竹あかり紹介ホームページ

(<http://kokurajotakeakari.com/about/>, 2022年12月12日最終閲覧)

轟良子編, 2022, 『本と私3号』本を語り『本と私』を作る会.

番野宅二編, 2016, 『郷土史 国境のまち高槻』, 高槻市民センター高槻まちづくり協議会.
文部科学省ホームページ: 大学による地方創生の取組事例集 (https://www.mext.go.jp/a_menu/01_d/chihoujirei.html, 2022年12月12日最終閲覧)

UNESCO, 2017, Education for Sustainable Development Goals: Learning objectives.

(https://www.unesco.de/sites/default/files/2018-08/unesco_education_for_sustainable_development_goals.pdf, 2022年12月15日最終閲覧)

